

清流

題字：芳野 充

平成31年4月30日
第28号

発行所 加来不動産(株)
発行者 加来 寛
北九州市小倉南区守恒本町1-12-23

穏やかに
静かに
清流のように

足元をみつめる

去年の夏あたりから、仕事関係において外部の方からわたしに講師のご依頼をいただいたり、県外でも仕事をされる機会がふえたり、仕事以外にも色々な役をおおせつかり、目の回るような忙しさになっていました。しかしそのことに対してわたしは、悪い気はしておらず、むしろ得意げになっていました。

ところがそのしわ寄せを、家族におしつけていることすら気付かない傲慢さを生みはじめていました。

例えば、家族との夕食の時間が極端に減る。誕生日や記念日などのイベントで外食する際のお店の予約をわすれてしまう。家族ででかける予定をあらかじめ聞いていたにも関わらず、仕事を入れてしまうなど、約束していたことをかんたんに反故するようになっていました。

これらのことに対してわたしは、「仕事だから仕方がない」「さまざまな団体から役をおおせつかることは悪いことではない」と、家族には申し訳ないと思いつつも、家族との約束より自分のしたいことを優先させていました。

するとつい先日、妻から「あなたは外ばかりにいい顔をして、家族をないがしろにしているのではないか。『思いやり』というのを口にしてはいるけど、一番身近な家族に思いやりの行動がとれていないのではないか」との言葉をかけられ、ハッとしました。

素心学塾塾長の池田繁美先生は、「思いやり」をおける優先順位として、一番わがままの出やすい「家族」が一番です、と言われます。また、崔後渠の残した「六然訓」のなかに、「得意澹然」とあります。「ものごとがうまくいっているときには、それに心をとらわれないようにしなければならぬ」という意味です。まさにわたしは得意げになり、足元ではなく遠くばかりを見ていたようです。

「謙虚さがなくなる兆候十四項目」の二番目には「約束を自分のほうから破りだす」とあります。いまのわたしが正にそうだと反省いたしました。遠くばかりを見るのではなく、しっかりと足元をみつめて歩いていきたいと思えます。

加来 寛

